

鳥根県江津市に暮らす中高年者の死生観と 終末期療養ニーズに関する意識調査

伊藤 智子・加藤 真紀・阿川 啓子
諸岡 了介*・浅見 洋**

概 要

日本では全国的に、高齢社会の進展、家族機能・地域共同体の衰退等に対応して、終末期療養に関する市民の関心が高まっている。本調査では、全国的にも少子高齢化が進む鳥根県の江津市に暮らす市民の死生観と終末期療養ニーズの実態について調査を行った。その結果、江津市の中高年者の理想とする死にとって重要なことは「周囲に迷惑をかけない」「苦痛が少ない」「闘病生活が短い」こと、女性は男性に比べて、終末期療養場所を「自宅以外」に求め、家族に依存しない医療に期待していることがわかった。周囲に迷惑をかけずに、最期まで生活の質を大事にしたいというニーズに対応した終末期ケアについて検討が必要である。

キーワード：理想とする死、終末期療養、中山間地域、意識調査

I. 研究目的

高齢化社会の進展、家族・地域共同体の衰退、人権意識の高まり等に対応して、今後の医療、介護現場、特に高齢者ケア、終末期ケアの臨床現場では、益々個人や地域共同体のニーズ、精神的安寧（Spiritual Well-being）に配慮したケアが提供される必要性が高まっている。そのような状況の中、終末期ケアに対する関心もまた高まりを見せている（鈴木、2011）。今後各地域で、満足して一生を終えるあり方として、人生の最期をどこで暮らすのか、どのような暮らし方を望むのかという療養ニーズを把握し、それに対応した政策づくりが必要である。全国的には厚生労働省が平成10年から終末期療養のあり方に関する調査を行っているが（厚生労働省、2004）、全国調査のため、地方での実態は明らかではない。終末期療養ニーズは地域の違いで様々な特徴があると思われる。そして、

その特徴に合わせた対応やケアのあり方が今後重要になると考えられる。

この度、全国的にも少子高齢化が進む鳥根県の中山間地域に暮らす市民の死生観と終末期療養ニーズの実態について調査を行った。今回はその結果の一部を報告する。

II. 研究方法

1. 調査方法

調査票「死生観と終末期療養についての意識調査」を作成し、鳥根県江津市の市街地を除く地域に暮らす40歳から79歳までの住民800名に対し郵送調査を行った。対象者は住民台帳から無作為に抽出した市民である。対象者には調査用紙と共に協力をお願いに合わせて個人情報 の 厳 重 な 取 り 扱 い に つ い て の 文 書 を 同 封 し た。

2. 調査内容

調査票は、厚生労働省の「終末期療養に関する調査」を参考に、独自の自記式質問紙を用いた。調査内容は対象者の属性（年齢・性別・同居家族・健康状態・介護経験・死別体験）、死

*鳥根大学教育学部

**石川県立看護大学

生観（死に対する不安感・尊厳死・理想的な死）、終末期療養生活について（告知の希望・自分が療養したい場所・在宅死の実現可能性・在宅死を実現可能にする要因）である。

解析ソフトは、SPSS18.0J for Windows を用い、療養したい場所「自宅」「自宅外」と性別、年代、同居人数の χ^2 検定を行った。危険率は 5%未満を有意水準として採用した。

3. 倫理的配慮

研究の実施については島根県立大学短期大学部倫理審査委員会の承認を得た。調査対象者の抽出にあたっては、江津市住民基本台帳の閲覧に関する規程に基づき「住民基本台帳閲覧申出書」に必要資料を添付し、手続きを行い、承諾を得た。また、データの目的外使用をしないことについて市長宛に契約書を提出した。抽出作業は江津市役所庁舎内の指定された場所にて行った。調査用紙の郵送には、協力の依頼文中に、回答は自由意思であること、無記名であることを明記した。

Ⅲ. 研究結果

1. 回収率及び対象者の属性

回収数 362, 回収率 45.3%, 有効回答数 350 (40代 76名, 50代 78名, 60代 103名, 70代 93名), 男性 152名(43.4%), 女性 197名(56.3%)だった。年代別の数は、60代が最も多く、103名(29.4%), 最も少ない年代は40代の76名(21.7%)であった。家族の人数は、2人家族が最も多く135名(38.6%), 6名以上の家族が最

表1 対象者の基本属性

項目	人数	(%)
性別	男性	152 (43.4)
	女性	197 (56.3)
年代	平均年齢	56.1±10.99
	40歳代	76 (21.7)
	50歳代	78 (22.3)
	60歳代	103 (29.4)
	70歳代	93 (26.6)
同居人数	1人	35 (10.0)
	2人	135 (38.6)
	3人	82 (23.4)
	4人	47 (13.4)
	5人	28 (8.0)
	6人以上	22 (6.3)

各項目の有効回答のみ表示

も少なく22名(6.3%)であった(表1)。

2. 理想的な死にとって重要なこと

理想的な死にとって重要であると思うことを「苦痛が少ないこと」「それまでの生活に悔いがないこと」をはじめとする9項目で回答を求めた(複数回答可)(回答項目は表2を参照)。全体では「周囲に迷惑をかけない」が257人(74%)と最も割合が高く、次いで「苦痛が少ないこと」237人(68%), 「闘病生活が短いこと」198人(57%)であった。性別にみると、男女とも全体での割合と順位が同様であり、「周囲に迷惑をかけないこと」が男性108人(72%), 女性148人(76%), 「苦痛が少ないこと」が男性105人(70%), 女性131人(67%), 「闘病生活が短いこと」が男性84人(56%), 女性113

表2 対象者の基本属性

	全体 n=346	性別(%)		年代別(%)				同居人数別(%)		
		男性 n=151	女性 n=195	40代 n=76	50代 n=78	60代 n=102	70代 n=91	1~2人 n=168	3~4人 n=128	5人以上 n=50
苦痛が少ないこと	237 (68.5)	105 (69.5)	131 (67.2)	55 (72.4)	55 (70.5)	67 (65.7)	60 (66.7)	114 (67.9)	85 (66.4)	38 (76.0)
それまでの人生に悔いがないこと	132 (38.2)	55 (36.4)	77 (39.5)	35 (46.1)	33 (42.3)	34 (33.3)	30 (33.3)	61 (36.3)	50 (39.1)	21 (42.0)
闘病生活が短いこと	198 (57.2)	84 (55.6)	113 (57.9)	42 (55.3)	34 (43.6)	65 (63.7)	57 (63.3)	99 (58.9)	75 (58.6)	24 (48.0)
死ぬ準備を済ませていること	77 (22.3)	21 (13.9)	56 (28.7)	23 (30.3)	19 (24.4)	23 (22.5)	12 (13.3)	32 (19.0)	29 (22.7)	16 (32.0)
家族や親しい人に最期を看取られること	82 (23.7)	38 (25.2)	44 (22.6)	20 (26.3)	17 (21.8)	23 (22.5)	22 (24.4)	36 (21.4)	33 (25.8)	13 (26.0)
出来る限り長生きをした後の死であること	55 (15.9)	27 (17.9)	28 (14.4)	7 (9.2)	12 (15.4)	18 (17.6)	18 (20.0)	25 (14.9)	22 (17.2)	8 (16.0)
周囲に迷惑をかけないこと	257 (74.3)	108 (71.5)	148 (75.9)	57 (75.0)	58 (74.4)	76 (74.5)	66 (73.3)	121 (72.0)	99 (77.3)	36 (72.0)
あまりお金をかけないこと	115 (33.2)	40 (26.5)	74 (37.9)	22 (28.9)	26 (33.3)	29 (28.4)	38 (42.2)	50 (29.8)	53 (41.4)	12 (24.0)
自然な死であること	186 (53.8)	80 (53.0)	106 (54.4)	36 (47.4)	41 (52.6)	56 (54.9)	53 (58.9)	91 (54.2)	74 (57.8)	21 (42.0)

人(58%)であった。また、この3項目の順位は、年代別、家族人数別でも性別と同じ傾向だった。

3. 療養したい場所

療養したい場所を「自宅」「近親者の家」「福祉施設」「病院（一般病棟）」「病院（ホスピス・緩和ケア病棟）」「その他」で回答を求めたが、今回は「自宅」と「自宅外」で集計を行った。

療養したい場所「自宅」「自宅以外」と性別、年代、同居家族人数の違いの関係をみるため χ^2 検定を行った。女性は男性に比べて有意に「自宅以外」を望む人が多かった。年代別や家族人数と療養したい場所（自宅と自宅外）との有意な差はみられなかった（表3）。

表3 療養したい場所の比較

項目		自宅		自宅以外		p値
		人数	(%)	人数	(%)	
性別	男性	70	(47.9)	76	(52.1)	0.022 *
	女性	69	(35.6)	125	(64.4)	
年代	40歳代	36	(47.4)	40	(52.6)	0.606
	50歳代	30	(40.5)	44	(59.5)	
	60歳代	37	(37.4)	62	(62.6)	
	70歳代	37	(40.2)	55	(59.8)	
同居人数	1-2人	62	(37.8)	102	(62.2)	0.461
	3-4人	56	(43.8)	72	(56.3)	
	5人以上	22	(45.8)	26	(54.2)	

* $p < 0.05$

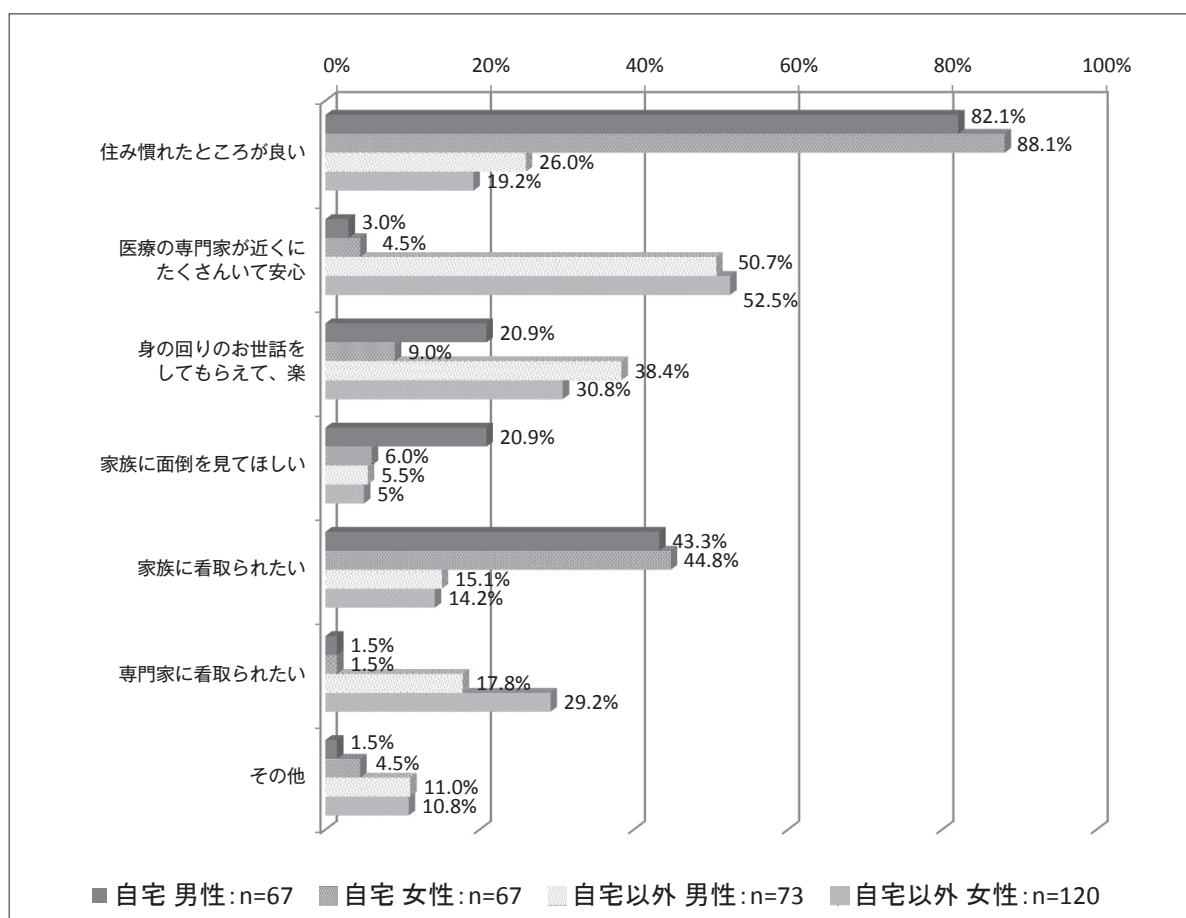


図1 療養場所の希望理由 (複数回答)

4. 終末期療養希望場所の理由

終末期療養希望場所として該当項目を選んだ理由を「住み慣れたところが良い」「医療の専門家が近くに沢山いて安心」などの7項目で回答を求めた(図1)。全体では「住み慣れたところが良い」「医療の専門家が近くに沢山いて安心」の2項目で、約半数を占めた。

終末期療養希望場所「自宅」「自宅外」別にみると、「自宅」を選んだ人は「住み慣れたところがよい」が、男性55人(82.1%)、女性59人(88.1%)と男女とも最も割合が高く、次に「家族に看取られたい」がそれぞれ29人(43.4%)、30人(44.8%)と高かった。「自宅以外」を選んだ人は「医療の専門家が近くにいて安心」が男性37人(50.7%)、女性63人(52.5%)、「身の回りのお世話をしてもらえて楽」が男性28人(38.4%)、女性37人(30.8%)であり、男女とも終末期療養場所として自宅を希望する人も自宅以外を希望する人も、その理由の上位2つは同じだった。しかし、自宅以外を選んだ人で3番目に割合が高い項目は、男性では「住み慣れたところがよい」19人(26.0%)であるのに対し、女性では「専門家に看取られたい」35人(29.2%)だった。

Ⅳ. 考 察

1. 理想とする死

本調査では、島根県の江津市に暮らす350名の中高齢者が考えている「理想的な死にとって、重要なこと」が明らかとなった。それは男女ともに「周囲に迷惑をかけない」「苦痛が少ない」「闘病生活が短い」という内容だった。上野は、「高齢者にとって深刻な問題は、老いるという経験に対する自己否定感であり、その中には他者から介護を受ける依存的な状態を受け入れにくいという感情が大きな部分を占めている。…中略…看護者の迷惑に対する思いやりと自分が相手から厄介視されることへの悲しみや怒りが『迷惑をかけたくない』という気持ちの中にある」と述べ(上野, 2011)、介護を受ける依存的な生活を送ることに対する自己否定感と自立困難による周囲からの厄介視が「周囲に迷惑をかけたくない」という心情を作り出している

ことを説明している。今回の調査でも同様な心理があると考えられる。また、年代別にみても7割以上の方が周囲に迷惑をかけない最期を望んでいることから、高齢期に入る前から、周囲に迷惑をかけないことを重視する文化があると考えられる。浅見はこれを「集団的死生観」という言葉で説明し、集団内での役割や職務が個人の意志より優先する日本文化について説明している(浅見, 2007)。また「闘病生活が短い」最期を望んでいることから、単なる延命を望まず終末期においてもQOLの高い生活を望んでいることが伺える。

2. 理想とする死と療養場所

理想的な死にとって重要なことへの回答は、男女に差が見られなかったが、療養したい場所については女性は男性に比べて有意に「自宅外」を望んでいた。女性が自宅外を望んだ理由として、「医療の専門家が近くにいて安心」「身の回りのお世話をしてもらえて楽」「専門家に看取られたい」の割合が高く、家族に依存しない自宅外での医療の場に対する期待が伺えた。

3. 島根県江津市民の終末期療養ニーズ

厚生労働省は、患者の意志を尊重した望ましい終末期医療のあり方について検討するため「終末期医療に関する調査検討会」を置き、平成10年から住民等の意識調査を実施している。その結果をみると、終末期医療に関心をもっている人は平成10、15、19年度調査で毎回約80%であり、高い割合を示している(厚生労働省, 2010)。また、できるだけ自宅で最期まで暮らしたいと考えている人は57.7%(平成10年度)、58.6%(平成15年度)、63.3%(平成19年度)と増加してきている(厚生労働省, 2004・2012)。それは、最期まで住み慣れた環境で、馴染みの人に囲まれ、自分らしく生活したいという気持ちを表していると考えられる。

しかし、今回の調査では自宅以外での終末期療養を望む女性が多く、医療資源に恵まれない中山間地域において、家族に依存しない医療に対する期待が伺えた。高齢期の中山間地域での暮らしの厳しさや配偶者に対する期待の低さ、独居になるであろう事も予測しての回答である

と捉えられるため、今後対策を検討する必要がある。

V. 結 論

1. 江津市の中高年者の理想とする死にとって重要なことは「周囲に迷惑をかけない」「苦痛が少ない」「闘病生活が短い」であり、最期までQOLの高い生活を望んでいる。
2. 女性は男性に比べて、終末期療養場所を「自宅以外」に求め、家族に依存しない医療の場に期待している。
3. 周囲に迷惑をかけたくないことを重視する文化をもち、最期まで生活の質を大事にしたというニーズに対応した終末期ケアについて、今後検討が必要である。

謝 辞

本研究の実施にあたり、協力して頂いた江津市市民の皆様、江津市役所担当課の皆様に深謝致します。

本調査は科学研究費補助金基盤研究（B）「ルーラルにおける住民の死生観と終末期療養ニーズの変容に関する総合的研究」の研究費によって行った。

文 献

- 浅見洋（2007）：死生観と看取り－日本人の死生観とケアニーズ－，臨床看護 33（13），1948-1953.
- 上野千鶴子（2011）：ケアの社会学－当事者主権の福祉社会へ－，太田出版，159-185，東京.
- 厚生労働省（2004）：終末期医療に関する調査等検討会報告書－今後の終末期医療のあり方について－，2013-09-2，<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/07/s0723-8.html>
- 厚生労働省（2010）：平成19年度終末期医療に関する調査結果の概要，2013-09-02，<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002sarw->

[att/2r9852000002sax1.pdf](http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002sax1.pdf)

厚生労働省（2012）：人生の最終段階における医療に関する意識調査，2013-09-2，<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002wehv.html>

鈴木隆雄（2011）：超高齢社会の実像を踏まえた健康福祉政策，公衆衛生，75（4），266-271.

The Concept Survey on Conception of Life and Death and Needs for Terminal Care of Middle and Higher Aged People at Shimane Prefectural in Gotsu City

Tomoko ITO, Maki KATO, Keiko AGAWA
Ryosuke MOROOKA* and Hiroshi ASAMI**

Key Words and Phrases : Ideal dying, Terminal care,
Hilly and mountainous area, Concept survey

*Shimane University educational department

**Ishikawa Prefectural Nursing University